

2020年
東京オリンピック開催決定!

体操王国復活を目指して 和歌山オレンジ体操クラブ

田中三きょうだいの夢、繋ぐ

7年後に開催される東京五輪に、夢をふくらませている子どもたちがいる。未来の選手を育てる指導者の戦いは始まった。



田中さんの指導法は、あくまでも自然体。「成功の、いいイメージを持たせてあげる事が大切」。体操部員、クラブのメンバーは「仲間であり、家族のようなもの」と話す。

感動は記憶に新しい。その3人の父として、また指導者として彼らを育てた

受け継がれる
体操王国の遺伝子

田中さんは、期待に満ちた笑顔を見せる。オリンピックとは指導者にとっても、選手にとっても、別格の大会だという。長い伝統と歴史。世界中から一流選手が集まる。勝ち負けだけで語れない精神性。そうした物語性のすべてが五輪というイベントを構成している。「それが日本で開催されるのですから、子どもたちが色めきたつのも当然ですよ」。しかし指導者としては悠長にしていられない。選手の育成には通常7〜10年かかる。選手の体調管理や7年後に向けたコンディショニングのピーク調整、技術やルールの最新情報収集など、「東京五輪の戦いは、すでに始まっています」。

オレンジ体操クラブの子どもたちが練習する北高の体育館。「あごをひいて!」。宙返りをしようとする小学生男児の背中に、田中教諭が手を添える。着地に成功した子どもの顔がバツと輝く。この笑顔を引き出すことで達成感を与え、やる気を持続させることが大切だという。「私もこの子たちと一緒に汗を流して、横顔は厳しただけでなく優しい父親の顔でもある。和歌山県では2015年に、紀の国わかやま国体が開催され、

国内開催に輝く子ども

「2020年東京オリンピック開催が決定した瞬間、『よっしゃ』と思いました。その日を境に、子どもたちの目の色がガラッと変わりましたね」と語るのは和歌山オレンジ体操クラブのコーチであり和歌山県立和歌山北高等学校の体操部監督である田中章一教諭。ロンドンオリンピックにおいて、田中和仁、理恵、佑典3きょうだいが見せた鮮やかな演技と



時には厳しく叱る事もあるが、ミスを正すことより上手く演技できたことを一緒に喜ぶ田中教諭。そして無理をさせない。「怪我をさせる事は指導者のミスですから」。

福岡県代表として国体にも出場し、和歌山県出身金メダリスト、早田卓次氏の指導を受け、その縁で和歌山で指導者となった。「和歌山は今までに多くの優れた体操選手を輩出した県です。その遺伝子が次の世代に受け継がれていくところを見届けたい」と力強く語った。



県産品PRサポーター「おいしい!健康わかやま産品応援隊」としても活動中の田中3きょうだい。